

青森県の三八上北や下北地区には、初夏から夏にかけて太平洋上に張り出した高気圧から、冷気を伴う東風が吹き付ける。この東風を青森県では「ヤマセ」と呼ぶ。稲作農家にとっては恨みの風だった。強く長く吹き続けると冷害を引き起こすからである。

三八上北や下北地区はヤマセの常襲地帯で、しばしば凶作に見舞われた。近代以降も数年ごとに凶作となった。特に1913（大正2）年の大凶作や昭和農村恐慌では、ヤマセの常襲地帯はもちろんのこと、津軽地区にも凶作の兆候が現れた。



剣吉駅でのリンゴ積み込み作業  
（昭和30年代・青森県りんご対策協議会所蔵）

なぜヤマセの常襲地帯で米を作り続けてきたのか。これは近代以前の歴史を振り返る必要がある。日本人の多くは農家であり、農家は年貢上納を義務づけられていた。近代以降、地租改正により年貢は金納となったが、米を換金して地租を払う必要があった。それゆえ農家である以上、米を作らねばならなかった。日本人の多くは、長いこと米を

しかし第一次世界大戦後の反動恐慌で養蚕業界は不況に陥った。そこへ昭和農村恐慌が襲いかかり、稲作は壊滅的な打撃を受けた。県当局を中心に救済策が講じられたが、その一方で米作りに対する批判も投げかけられた。青森県は寒冷地であり豪雪地帯でもある。それゆえ米への迷信を捨て、工業や牧畜など他の産業を興す必要が唱えられた。

現在の青森県では「ふじ」が圧倒的な生産量を誇っている。しかし戦前のリンゴは、津軽地区が「国光」、三八地区は「紅玉」が大半を占めていた。「紅玉」は昭和恐慌を経て「南部リンゴ」を象徴する存在になったのである。

## 農家を救ったリンゴ 中園 裕

（県民生活文化課  
県史編さんグループ主幹）

作らされてきたといえるだろう。

三戸町や五戸町、そして南部町でも基幹産業は稲作だった。いずれもヤマセの常襲地帯なので、しばしば凶作に見舞われた地区である。日露戦争後、欧米から

生糸の需要が高まり、国や県が蚕糸業を推進した。こうした傾向を受け入れ、三八地区では養蚕の伝習が始められ、大正期には急速に桑園が広がっていった。

こうして三八地区では、ヤマセに弱い稲作や採算がとれない養蚕からリンゴへと転換する農家が相次いだ。1926（昭和元）年から1940（昭和15）年の15年間で、リンゴ栽培面積は県全体で2.5倍増だった。三戸郡では12倍と大幅に増加した。

その後、国鉄の合理化政策で三八地区の貨物輸送も多くが姿を消した。現在の南部リンゴはトラックで輸送されている。このためリンゴの出荷時期になるとリンゴ箱がうずたかく積まれた光景は見られなくなつた。また、三八地区でも「ふじ」をはじめ、さまざまな品種のリンゴが作られるようになった。しかし「紅玉」の生産は今も盛んで、店頭でも文字通り真っ赤なリンゴが形良く並べられている。

三戸郡では12倍と大幅に増加した。

と大幅に増加した。